

斧琴草

へ花をはつす 一両枝 彼のれきけんが山深く へ姿わらべに 若
草の春いくかえり 廻りめぐりて廻る日の 七百歳の秋となり
へ天のこんずや筭の 大盃に なみなみと へよい酔い心 齡を延ぶ
る 茜を顔に恥ずかしゃ へその故事を 菊の宴 我が朝にてもこ
れをとり よろこび重ぬる節にして 秋風樂と奏で舞う へ加賀のお
菊は評判娘 顔は白菊 紅菊つけて よい子のよい子の 良い娘の
小菊 とりなりしゃんと 菊流し 咲いて見事な 扇車の くるく
る車菊 重ね菊 一重二重三重四重七重 やんや八重菊 へ夜
の灯 夜の雨 となり座敷の爪弾きに つい菊菱や 菊重ね へさて
この花を愛ずる人 東離が元に植えおきて 日毎に心なぐさむる
へ斧を手にして晴れては樵 又雨の日は琴を友とし 斧と琴と菊を
合わせて 良きこと聞くは よろず目出度し。